

「移植医療を考える」

かつての私にとって、「移植医療」「臓器移植」等の言葉は、小説や映画の中に登場する医療で、あまり身近なものではありませんでした。

考えが大きく変わったのは、「改正臓器移植法」施行間近の平成22年の春、心臓疾患のため臓器提供を待つ少女の親族の方にお会いし、小児の臓器移植問題に直面してからです。

当時、国際移植学会の「渡航移植の原則禁止」やWHOの新指針を受け、国は、死体ドナーを増やし自国での臓器移植を増やすよう法改正したところであり、公に渡航移植の支援することはできませんでした。もちろん個人的には、多くの公務員と同様に募金に協力しましたが・・・。

また、臓器移植コーディネーターの安田氏との雑談も私に大きな影響を与えました。

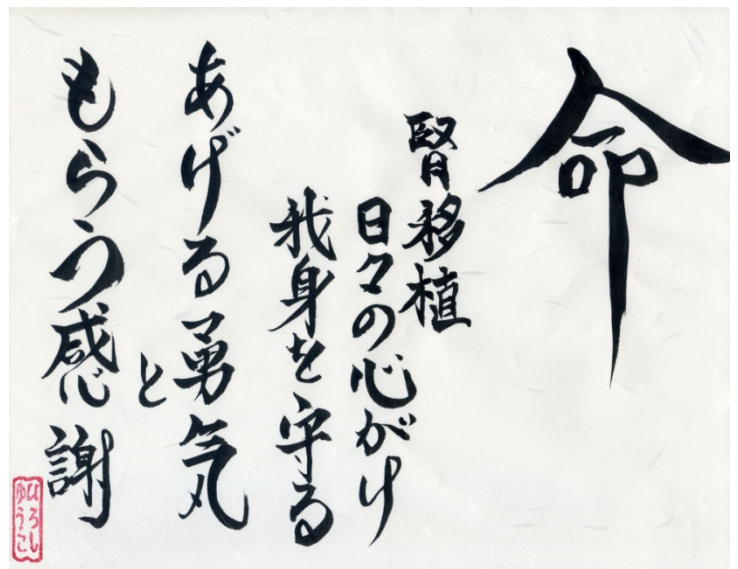
Y氏に「小説とかでは、臓器移植を受けたレシピエントが移植前と性格が変わり、ドナーの性格に似てくるというような話があるが、本当にそんなことがあるのか？」と尋ねたところ「移植を受けた患者さんの性格が変わるのは当たり前のこと。移植前には多くの制約を受けて生活していた人が、移植後元気になり、制約の多くが取り払われれば性格が変わらない方がおかしいでしょう。」とのことでした。

また、「酒も飲みタバコを吸う私の臓器は、提供しても使い物にならないでしょう？」と尋ねれば、「移植を待っている患者さんの臓器は、ほとんど機能しておらず、酒やタバコでダメージを受けていても、あなたの臓器が使える可能性は、決して低くはないですよ。」とのこと、安田氏との話から臓器提供を待つ患者さんの厳しい生活状況を想像させられました。

移植医療の進んでいる欧米に比べ、我が国の臓器提供件数は非常に少ない。このことは、日本人の道德意識が低いとかではなく、死生観や宗教観の違いによるものが大きいと思われまます。宗教によっては、輸血を受けるよりは死を選ぶこともあり、特に「脳死を人の死」とすることには賛否分かれるのも当然のことと思います。

個人それぞれの自由意思を尊重するのは当然のことですが、臓器移植でしか助からない患者さんのためには、一人一人が「移植医療」について正しく理解し、真剣に考えてもらえるよう訴えかけ一人でも多くのドナーが現れるよう、微力ではありますが力になりたいと思っています。

50代 公務員



(挿絵 移植者家族のご提供)